

# Artfull うちうら

[発行]  
内浦公民館  
〒919-2351  
高浜町山中 104-4-2  
TEL.0770-76-2007  
FAX.0770-76-2008  
E-mail  
uchiura\_c.c@town.takahama.fukui.jp



明けましておめでとうございます。  
本年もよろしくお願ひいたします。



《内浦公民館～多肉植物寄せ植え教室～》



令和 5 年 12 月 9 日 (土)

内浦公民館 会議室で【多肉植物寄せ植え教室】を開催しました。講師は大角由香里さん。20種類以上の多肉植物は色も形も様々。アドバイスをうけながら小さくて可愛い多肉植物を植えていきました。お家で多肉植物を育てている方からの質問も多数ありました。多肉植物の育て方や水やりの注意点などを詳しく教えていただきました。



身近な生活環境講座  
～うちうらレモンを知ろう～



令和 5 年 12 月 16 日 (土)

内浦公民館 会議室と五色山公園内のレモン畑で講座を開催しました。初めに、高浜町役場産業振興課の職員とレモン生産組合の内藤達雄さんから《うちうらレモン》の取り組みとレモンの育て方についてお話しを伺いました。その後、ピラフランカという種類のレモンの収穫体験を行いました。皆さんが驚くほど大きく育ったレモンがたくさん木に実っていて、レモンの香りに包まれながらあっという間に約 80 kg収穫できました。貴重な体験でした。



●開館時間 午前 8 時 30 分～午後 10 時 ●利用時間 午前 9 時～午後 9 時 30 分  
※夜間利用が無い場合は午後 5 時で閉館いたします。

## ふゆ休み習字教室

令和5年12月27日(水)

内浦公民館で《ふゆ休み習字教室》を開催しました。講師は、居関里江さん。学年ごとに冬休みの課題を練習しました。『書き方』は和室、『習字』は会議室で行いました。初めに先生のお手本を見て筆運びや名前を書くスペースを考えて書くよう教えていただきました。先生に添削をしてもらって、清書を書き上げていました。



## フラワーアレンジメント教室

令和5年12月27日(水)

会場を2か所に分け、午前は【あおば憩いの家】午後は【内浦公民館】でお花を生けました。講師は、馬場友子さん。たくさんの花をみていると、気持ちがワクワクしてきます。皆さんはいつも楽しみにされていて、どちらの会場でも夢中になって作品を完成されていました。



## フレイルって聞いたことありますか？



内浦公民館で毎月開催している元気あっぷ生き活き倶楽部で体操した後の皆さんに【フレイルチェック】をしていただきました。事前にアンケート用紙に記入してもらっています。この取り組みのお手伝いをしてくださるのが、緑の服を着た『フレイルサポーター』の皆さんです。栄養・運動・社会参加の3つの視点でチェックする為、握力や片足立ち上がり等の運動の他、滑舌チェックも行いました。和やかな雰囲気の中、分かり易く説明をしていただきながら行いました。フレイル予防を心掛けて、いつまでも元気に過ごしたいですね(^^\*)

集合写真で皆さんが両手の親指と人差し指で作っている【指輪っか】  
これで自分の筋肉量を測ります。  
フレイルチェックに必要なんです。



\*フレイルとは、加齢により心身の活力が低下した状態の事です。いつまでも健康に過ごしていく為に、フレイルを予防する事はとても大切です。



## 館長の《こーひーぶれいく》No. 105



今回は 川上未映子 著 「黄色い家」です。

「人はなぜ、金に狂い、罪を犯すのか」社会に適応できない人たちが犯罪に手を染め、ノンストップで転落していく衝撃の結末。

コロナ禍のなか主人公の花はあるネットニュースに目が止まる。それは少女を監禁、暴行により、ある女(黄美子)が逮捕されたというものだった。20年前、黄美子と暮らしていたある記憶がよみがえる。

当時高校生の花は、スナックで働く母親と2人で日々の食事にも事欠く、貧しい暮らしをしていた。そんな暮らしから脱け出そうと働き始めたが、貯めていたお金を母の男に盗まれる。自暴自棄になっていた時に黄美子と出会う。未成年の花だったが、黄美子とふたりでスナック「れもん」を始め、同じような境遇の蘭と桃子と出会った。

黄美子は花のことを何でも肯定してくれ、唯一の頼れる存在であったが、何も考えられない、何もできない、掃除だけが得意な大人だった。

4人は共同生活を始めることとなり、スナックの営業も安定し、平穏な日々が続くが、ある日スナックが火事で焼失してしまう。責任感の強い花は働く場所を探すが、身元を保証するすべもない花はまともな働き口はなく、やがて闇の世界へと踏み込むことになる。

それは世間を騒がしている「闇バイト」のようなシノギ、偽装クレジットカードの「出し子」であった。花たちは、1日に何十万という金を得られるようになり、花は桃子たちに毎月給料を払い、アパートの家賃を払い、スナックを再開する資金を段ボール箱の中にため込むが。

蘭と桃子には帰る場所もあり、未来を描くこともできる。花には何もない。母は行方知らずになり、ひとりでは何も出来ない黄美子を守り生活を守るために、花は自分を追い詰めていく

常に身の危険を感じながら出し子の仕事続ける花は、のんきに過ごす蘭や桃子への不満が募り、激しい怒りに変わっていく。シノギの仕事を回してくれていたヴィヴィが飛んだことで、花が貯めていた2,000万の奪い合いになり、3人の決裂は決定的になる。

ここに登場する花も黄美子も桃子も蘭もヴィヴィも「悪人」ではない。社会に適応出来ずに、金を得る手段が犯罪であっただけなのです。人は環境も親も選べず生まれてくる。自分の能力ではどうにもならない現実もあることを知っていても、手を差し伸べる人は少ない。金でしか現状から這い上がる手段はないのでしょうか。

「花はさまざまな経験を通して『金はいろんな猶予をくれる。考えるための猶予、病気になる猶予、なにかを待つための猶予』という考えに至っています。明日のことがわからない、死ぬことを直視できないわたしたちの在り方、ほとんど向けだすことが不可能に思える資本主義との相性が、ものすごく合っているんだと思う。」と著者は語っています。

(裏面につづく)

